

愔氣りんきの火の玉

愔氣は女のつつしむところ、疝氣ぜんきは男の苦しむところなんていいいますが、愔氣、つまりやきもちというのも、やきかたというのがむずかしいようでございます。

やきはしやせんと女房いぶすなり

やくというほどでなくて、狐色きりいろぐらいいにいぶす嫉妬しとというものはかわいらしいものですし、寝たなりでいるはきれいな愔氣なり

夜なかに帰ってきた亭主をでむかえもしなければ、着がえの手つだいもしないで、寝たままでいるのは、これもやきもちのせいなのですが、これも嫉妬としては性質たてのいいほうでございます。それが

愔氣にも当たりである金だら

かんざしも逆手に持てばおそろしい

朝帰り命に別状ないばかり

なんてことになってくると、やきもちもだんだんとおそろしいことになってまいります。

浅草の花川戸に、立花屋という鼻緒問屋はなながございました。ここの旦那がたいへんに堅かたいかたでございました、女はわが女房のほかにはまったく知らないという、まことに堅餅かたもちの焼きざましのような人物で……この旦那が、あるとき、仲間の寄り合いのくずれで吉原へさそわれました。

さあ一度あそんでみると、その味をわすれることができません。毎日のようにあそびにゆくようになったのですが、もともと商人でございますから、そろばんをはじいてみてかんがえまして。こんなことをしていたんでは、いくら財産があってもたまったもんじやない。なんとか安くすませる方法はないものか——いろいろ思案した結果、おいらんを身請けして、根岸の里へ妾宅めかけをかまえてかこいました。

いわゆる黒板塀に見越しの松とかまえて、お妾めかけさんは狎なを抱いて暮らしているというのがよくみる光景のようで……狎を抱いていけば、ご当人がひきたちますからたいへんにお得ですが、なかには狎を生んだんじやないかなんていう、狎と瓜二つなんてかたもおります。

で、旦那は、月のうち、本宅に二十日、妾宅に十日お泊りになるようになります。案の定、根岸本宅のほうでは、このごろ旦那のようすがおかしいというのでしらべてみると、案の定、根岸に妾宅があるということがわかりましたから、本妻としてもおもしろくありません。

「ただいま帰りました」

「お帰りなさいまし！」

「おいおい、おまえさんは女でしょ？ もうすこししずかにあいさつはできないのかい？ ……」

あーあ、くたびれた」

「ええ、そうでございましょう。おつかれでございましょうよ……ふん」

「おい、おかしなことをいうね。おい、お茶をいれておくれ」

「あたくしがいれたお茶なんかおいしくございますまい。ふん」

「おい、どうでもいいけど、そのふんてのはおよしよ。感じがわるいよ。どうせ笑うなら、大きく、あはははと笑いなさい……あー、腹がへった。めしを食おう。お茶づけにでもしておくれ」

「あたくしのお給仕なんかじゃあおいしくございますまい。ふん」

「いいかげんになさい」

旦那だって、これではおもしろくありませんからブイととびだしてしまつて、こんどは妾宅へ二十日、本宅へ十日とあべこべになつてまいりますし、そのうちには、だんだん本宅へ帰らないようなことになつてまいります。

さあ、こうなると、ご本妻のほうではおさまりません。こういうことになるのも、すべて根岸の女があればこそだ、あの女さえ亡き者にしてしまえば万事うまくいく——そうだ、あの女を祈り殺してしまおうというので、真夜なかに、わら人形を杉の太木へ持つていつて、五寸釘でカチーン、カチーンと打ちつけはじめました。

このことが根岸のほうにも知れましたから、こちらでもだまつちやありません。

「なんだって？ あたしを五寸釘で祈り殺すんだって？ なにいつてるのさ、自分で旦那のきげんがろくにとれないから、それで旦那がこつちへくるんじゃないか。へん、そつちが五寸釘な

ら、こつちは六寸釘でいくよ……ばあや、すぐに六寸釘を買ってきておくれ」

てんで、根岸のお妾さんは六寸釘で、真夜なかにカチーン、カチーンとのろいの祈り……

このことが、こんどはご本妻に知れましたからたいへんで……

「なんだい？ 根岸が六寸釘で祈つてゐるって？ よーし、そんならこつちは七寸釘だよ。すぐに七寸釘を買つといいで」

さあこうなると、おたがい、八寸釘だ、九寸釘だと競争で祈りはじめました。

ところが、むかしからいう通り、人をのろわば穴二つとやらで、ご本妻もお妾もおなじ日のおなじ時刻に亡くなるというさわざ。

こうなると、まぬけな目にあつたのは旦那で、一ぺんにお葬式を二つもだすというあわただしさでございます。

「ええ、旦那さま」

「おや、番頭さんか。なにか用かい？」

「はい……その……旦那さまはご存知でございませうか、あの評判を？」

「どんな評判だい？」

「毎晩真夜なになりますと、こちらのお宅から火の玉があがつて根岸のほうへむかひまして、また、根岸のほうからも火の玉が花川戸めざしてとんでまいりますと、ちょうど大音寺前のごろで、この火の玉と火の玉がぶつかつて、火花をちらして喧嘩をするというところでございます」

「うん、あたしもちよいと耳にしたんだが、そんなに評判になつていたんでは、店ののれんにか

かわるねえ、信用にかかりますよ……どうしたらいいだろう？」

「さようでございますねえ……いかがでございますよう。どちらの火の玉も、もとはといえば旦那をなかにはさんでの恪気かもとでかつかとしているのでございますから、ここはひとつ、旦那さまが仲裁なさるということでことをおさめになつてはどんなもので？」

「うん、それはいいとこへ気がついた。さつそく今晚でかけましょう。おまえもいっしょにしておくれ」

「かしこまりました」

さて、その晩おそく、旦那は、番頭を供につれて、浅草たんぼをななめに抜けて大音寺前へやってまいりました。

「旦那さま、さびしゅうございますね」

「ああそうだな……しかし、ただこうして待っているのも退屈なもんだな……えーと……」

「旦那さま、なにをしていらっしゃいます？」

「いえね、いま、あたしはたばこが吸いたいんだが、あいにく火道具をわすれてきてしまつて……番頭さん、ちよいと貸しておくれでないか」

「あいにくと、てまえはたばこをやりませんもので……」

「ああそうだった。おまえさんはたばこをやらなかったね……どうもそうになると、意地のきたなもので、むしようにたばこが吸いたくなつちまつた」

はなしをしておりますと、根岸のほうからひとつの火の玉がわがわが音をたてて近づいてきた。

フワフワ……こちらへむかつてやってまいります。

「旦那さま、あれが根岸の火の玉で……」

「ああ、なるほど……おいおい、おーい、ここだよ」

旦那が声をかけますと、火の玉がぐるぐるすると三べんまわってぴたりととまりました。

「や、ものすごいね。しかし、まあよくきてくれた。おまえのくるのを待ってました。で、おまえがでてくる心持ちはよくわかつてるんだけど、なにしろ、あれこれと評判になつてこまるんだよ……あはなしの途中だが、ちよいと待っておくれ。いま、あたしはたばこが吸いたいんだが、火がなくなつてこまつておんだ。ちよつとこちへきておくれ。おまえの火でたばこをつけさせておくれ。うん、うん、ついた、ついた。はあ、うまいねえ、ありがと……そこでね、おまえがでてくることはおだやかでないんだよ。うちの家内はね、しろうとでわからずやだ。だから、どうしてもおまえさんにつつかかるわけだが、そこはおまえさんは酸いも甘いも心得てる苦労人だ。なんとかかうまく下手にでて、あれと仲なおりをしておくれでないか。ねえ、なんとかうまくやつておくれ……もつとこちへきて、もう一服つけさせておくれよ」

と、旦那がたばこを吸っておりますと、花川戸のほうから火の玉がぱつとあがつたかとおもうと、こっちは根岸の火の玉みたいにフワフワなんてとんでまいりません。ビューンとうなりを生じてまっしぐら……

「旦那さま、旦那さま、あれがおかみさんの火の玉で……」

「いや、こりゃあすごいね……おいおい、おーい、こっちだ、こっちだ」

とよびますと、ビューンと一直線にとんできた火の玉が、ぐるぐるぐるぐると五、六ぺんもまわってぴたり。

「いや、よくきてくれた。おまえのくるのを待ってました。いま、根岸のやつにもはなしをしたんだよ。すると、ようやくわかってくれて、ねえさん、まことに申しわけないって、そういつてわびてるんだから、おまえさんもうかきげんをなおして仲なおりにやっておくれ。でないと、あたしがこまるじゃないか……だからね、いろいろはなしもあるけどもさ……すまないけど、ちよいとこっちへきておくれ。また一服やりたくなっちゃった。あたしがね、たばこをね……」

と、旦那がきせるを持ってゆくと、ご本妻の火の玉がすーっとそれで、
「あたしの火じゃおいしくございますまい。ふん」